

## 幼小をつなぐ音楽活動の可能性(4)

—絵本を用いた「表現遊び」から「音楽づくり」へ—

岡 林 典 子

(児童学科教授)

難 波 正 明

(教育学科教授)

山 崎 菜 央

(附属小学校教諭)

深 澤 素 子

(京都幼稚園主事)

松 田 幸 恵

(京都幼稚園教諭)

藤 井 香 菜 子

(京都幼稚園教諭)

高 橋 香 佳

(京都幼稚園教諭)

大 瀧 周 子

(京都幼稚園教諭)

### 1. 研究の背景と目的

#### 1.1 次期幼稚園教育要領・学習指導要領の方向性と幼小接続の在り方

現在、文部科学省において2030年の社会とその先の豊かな未来を築くために、学校教育の中核となる教育課程や、その基準となる次期学習指導要領及び幼稚園教育要領の改善・充実が図られている<sup>1)</sup>。

幼児教育と小学校教育の接続の観点からは、具体的な方向性として「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が、「自立心」「協同性」「言葉による伝え合い」「豊かな感性と表現」などの10項目に整理された。それは「幼稚園等と小学校の教員が持つ5歳児修了の時の姿が共有化されることにより、幼児教育と小学校教育との接続の一層の強化が図られることが期待される」ものとして位置づけられている<sup>2)</sup>。また、小学校においては「全ての教科において幼児教育との接続を意識した教育課程を編成したり、幼児教育の特色を生かした総合的な指導方法を取り入れたりするなど、…幼児教育との接続の充実や関係性の整理を図る必要がある」と示されている<sup>3)</sup>。

このように幼児期に育まれる資質・能力を、徐々に小学校の各教科に応じた学びへと系統的につなげることが必要とされている。

#### 1.2 近年の幼小接続への取り組みと課題

近年は幼児教育の重要性への認識が高まり、質の高い幼児教育を提供することや、系統性を見通した幼小接続の在り方が求められている。

そのことを背景に、教育現場と大学等との連携の必要性も強く指摘されており、幼児教育を担う教員の研修はもとより、教員養成段階における高い資質・能力の育成や、指導教材の開発等も早急な課題となっている。

それを受けて、お茶の水女子大学附属学校園や新潟大学、神戸大学などの附属校園では、幼小接続期のカリキュラム研究や、そこからさらに広がりをもたせた幼小中一貫教育での教育課程編成の研究開発が組織的に取り組まれている<sup>4)</sup>。

他方、文部科学省による平成26年度の幼児教育実態調査では、各市町村において接続を見通した教育課程の編成・実施が行われている割合は17.0%で、2割に満たない状況である。また、教育課程の編成にあたり、小学校と情報交換などの連携をした幼稚園は、公立園では約7割(69.6%)であるが、私立では5割に満たない状況(46.3%)にあり、教育課程の接続の不十分さが課題とされている<sup>5)</sup>。

#### 1.3 幼小をつなぐ音楽活動と教材について

衛藤(2015)は、幼児期の遊びの中にある音楽的な表現の萌芽を小学校低学年の音楽学習へと連続性をもって発展させることで、幼稚園と小学校の連携が図られると指摘している<sup>6)</sup>。そうした研究例として、矢部(2013)は、幼児のごっこ遊びにみられた子どもの売り声から発展させて、小学校1年生の指導内容を「声の抑揚」「拍の伸縮」と設定し、「売り声をつくろう」という音楽づくりの実践を試みた<sup>7)</sup>。また、吉永ら(2013)は、《ゆきのこぼうず》を同一

教材として、動作と音高の変化を関連づけた幼児の表現活動から、音程を正確に歌唱することを目指す1年生の授業へと、学びの連続性の明確化を図っている<sup>8)</sup>。しかし、幼児の表現活動を小学校の「音楽づくり」へと意識的につなぐ取り組みはまだ少ない。

筆者らは、これまで校種は異なるが同じ学園内で音楽教育と表現教育に携わる者として、幼稚園と小学校の子どもたちの育ちをつなぐ音楽活動について研究を重ねてきた<sup>9)</sup>。

わらべうたや遊び歌の実践からは、子どもたちの遊びの中から自由な創造性の芽生えを捉えることができた。また、絵本『だるまさん』を用いた実践では、絵本の視覚的情報がオノマトベと動きに統合されて豊かな表現が生まれ、幼児期から小学校へとつながる音楽学習の素地の形成への示唆が得られた<sup>10)</sup>。

本研究は絵本を用いた幼児の表現活動を小学校の「音楽づくり」へとつなぐ試みである<sup>11)</sup>。筆者らは話し合いを重ね、絵から感じるイメージを身体表現やオノマトベを用いて引き出し、それを民族楽器の音で表現することを内容として設定し、幼稚園と小学校においてほぼ同じ内容で実践を行った<sup>12)</sup>。

本稿の目的は、それぞれの実践結果を分析し、絵本を用いた幼小をつなぐ音楽活動の内容について検討することである。具体的には、絵本やオノマトベを用いることの有効性、民族楽器使用の意義など、本研究で実践した音楽プログラムの内容を検討する。

## 2. 研究方法の設定<sup>13)</sup>

### 2.1 実践の概要

幼稚園と小学校での実践過程と内容は、ほぼ同様である。全体として3段階の過程を考え、それを幼稚園では3回の保育活動で行い、小学校では2回の授業で行った。

実践に際して、以下の3点を工夫した。

- (1)紙の動きを真似る。
- (2)絵から音や動きをイメージするなど、要素の異なるものを結び付ける経験を促す。
- (3)保育・教育現場における定番の打楽器ではな

く、音や奏法に対する先入観のない民族楽器を用いて、イメージに沿って音を選ぶ。

以下の表1に、実践の全体的な流れを示す。

表1 実践全体の流れ

進度	主な内容
第1段階	紙の動きをまねる： 担任教諭が動かす紙の動きを模倣し、オノマトベを発する
第2段階	絵のイメージを音声で表現する： 絵から感じる音のイメージをオノマトベで表し、身体表現を加える
楽器の音を探索する	
第3段階	絵のイメージを楽器で表現する： 「音楽づくり」への展開の可能性を探る

音楽づくりにおける幼小接続の可能性を探る目的をもつ本研究では、小学校学習指導要領「音楽」における第1学年及び第2学年の音楽づくりの内容と、幼稚園教育要領の領域「表現」の内容をふまえ、音楽づくりの基盤ともいえる「遊びの中で様々な音があることに気づき、その特徴を知る」というねらいを設定した。

子ども自身が持つ内なるイメージを何らかのかたちで表に出すことができれば、創造的活動である音楽づくりにつなげていくことができるのではないかと考え、本研究ではイメージのものとなるものとして、絵本を教材に選んだ。実践内容には、図形からイメージを感じ取ることと同時に、イメージを「遊び」として音声表現・身体表現に結び付ける実践を計画した。またこれに加えて、音楽づくりへの展開として、楽器（音）で絵本の色や形を表現することにした。

### 2.2 絵本『がちゃがちゃ どんどん』について

子どもたちが音をイメージするための教材として、絵本『がちゃがちゃ どんどん』（元永定正さく／福音館書店、1986年）を用いた。



### 【絵本の選択理由】

- ①抽象的な形がオノマトペとともに鮮明な色彩で描かれており、オノマトペの音とイメージを結び付けるのに適している。
- ②色・形とオノマトペから感じるイメージをもとに、声と体の動きを連動させて、自由に表現して遊ぶことができる。
- ③描かれた色や形から、音の高低や強弱を感じることができる。

但し、実践ではオノマトペと動きと楽器の音をつなげて、いろいろな音に気づかせようとするのが目的である。絵本に掲載されているオノマトペが子どもたちの発想を規定してしまうことのないように、筆者らはオノマトペがある場合と無い場合を想定して話し合った結果、本研究では、絵に添えられているオノマトペを隠して提示することにした。

実践では、絵本の中から形の対比がはっきりしている2頁（絵本『がちゃがちゃ どんどん』, p.2-3）と、様々な形が掲載されている2頁（同, p.20-21）を選んだ。そして、まず子どもたちに絵を見せ、子どもたちから自由にオノマトペを引き出し、それを音に結び付けるように工夫した。

### 2.3 民族楽器の使用と種類について

実践で用いる楽器の選択は、「特別な訓練や知識がなくても、どの子どもでも気軽に音を鳴らせる打楽器が相応しい」という深澤の提案を参考にした。

しかし、これまでに合奏経験のある子どもたちにとって、身近に感じられる鈴やカスタネット、タンバリンといった楽器はすでに演奏方法を知っており、自由に鳴らすことが阻害される場合が想定される。そこで、話し合いの結果、実践では絵本の抽象的な絵を教材にしているため、子どもたちがこれまでに体験したことのない楽器から、幅広く音を選ぶことに決めた。今回は民族楽器の中から、安全で子どもに扱いやすいサイズの打楽器9種類を選び、5～6人のグループに1セットずつ行き渡るように準備した。



【写真1】実践に使用した民族楽器

楽器の内訳は、(A) 植物を材料にした楽器 (①アゴゴウッド [側面がギロとしても使用可能なウッドブロック], ②レインスティック, ③カシン [小さな粒入りの編みかごの楽器], ④小マラカス, ⑤チャフチャス [紐に木の実をつなげた楽器], ⑥樽型シェーカー), (B) 金属素材の楽器 (⑦マンジューラ [紐付きシンバル], ⑧ジル [フィンガーシンバル]), (C) 皮素材の楽器 (⑨パーランクー [片面に牛皮を張った太鼓]) である (写真1)。

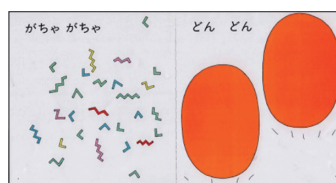
## 3. 幼稚園で行った実践について

### 3.1 方法とねらい

2016年6月～7月にかけて、筆者らは京都幼稚園年中児、年長児のそれぞれ2クラスを対象にして同じ内容の保育を3日間行った。前述した全体の流れに沿って、綿密な打ち合わせを行い、年長児クラスの実践を松田と藤井が担当し、年中クラスを高橋と大瀧が担当し、岡林と佐野（京都橘大学）が参観し、VTRと筆記により記録した。方法と手続きについては表2にまとめた。また、3回の実践のねらいを表3に示した。

表2 幼稚園での実践の方法と手続き

対象	京都幼稚園 年長児2クラス、年中児2クラス
実践日時	2016年6月24日～7月2日
方法と手続き	<p>①初回の保育実践を参観し、保育室の3方向からの映像記録と、筆記記録を取る。</p> <p>②第2回は、空き保育室に楽器を並べ、1グループ(5～6人)が約7分ずつ楽器を自由に鳴らす。その様子を3方向からの映像記録と筆記記録を取る。担任保育者は在室しない。</p> <p>③第3回の実践を参観し、3方向からのVTR記録と筆記記録を取る。</p>



【図1】絵本『がちゃがちゃどんどん』p. 2-3

年長クラスの子どもたちは、左頁の絵(図1, p. 2)の中の1つ1つの細かい図形を見逃さずに捉えて、その形を表現していた。また、右頁の絵(図1, p. 3)では、形だけでなく、楕円の下方にある細い線にも着目して、楕円が空に浮かんでいるように捉えて表現する姿もみられた。

大人は、絵を全体として俯瞰的に捉えがちであるが、子どもたちは絵の細部にまで意識を向けて表現していた。指導に際しては、このような違いを十分に理解して臨むことが大切である。

さらに、子どもたちは固定観念に捉われずに、多様なオノマトペを挙げて、自由に自分なりの表現を楽しんでいた。左頁の絵からは、概ね「ビリビリ」「ゴロゴロ」「チョロチョロ」「クチャクチャ」など、テンポの速いオノマトペと細かい動きの身体表現がみられた。右頁の絵からは「ドンドン」「ピョンピョン」など、跳ねる動作を伴うようなオノマトペや(写真3)、「ユラユラ」のような、ゆったりした動作を伴うオノマトペが挙げられた。



【写真3】右頁を「びよんびよん」と動く

### 3.2 第1時の実践の様子

子どもたちは、ウォーミングアップとして、保育者が様々な動かす紙の動きを真似た(写真2)。戸惑いつつも次第に自分の体と紙の動きを一体化させ、「クウィーン」「クニャクニャ」



【写真2】紙の動きを真似る

などのオノマトペを発しながら声と動きの表現を楽しんだ。

次に保育者は絵本から対比がわかりやすい2枚の絵(図1)を取り出して提示し、オノマトペを発しながら身体表現することを促した。

また、年中児は年長児に比べて、抽象的な形を具象的なものに見立てて捉えがちなようで、左頁の絵を見るなり、「かみなり」と声が挙がり、保育者の「この絵からどんな音が聞こえるかな?」という問いかけに、「ゴロゴロ」「ピカピカ」「ガラガラ」など雷鳴や稲妻を連想しているような答えが多くみられた。



### 3.3 第2時の実践の様子

第1時から3日後の第2時の実践では、5～6人ずつのグループになった子どもたちが、順番に楽器を並べた部屋に来て、約7分ずつ自由に楽器を鳴らし、音探索をした。大勢で一度に鳴らすと自分の音をしっかり聴けないので、音探索はグループごとに別室で行った。部屋に入ると、子どもたちは好奇心に満ちた表情で楽器を意欲的に触り始めた。楽器の使い方を全く説明しなかったため、子どもたちは、レインスティックを上下に振ったり、刀のように振り回したり、太鼓のビーターで叩いたりなど、それぞれの子どもが自分なりに奏法を工夫して音の探索を行っていた(写真4)。



【写真4】 楽器の音に耳を傾ける

楽器の音探索を単に音を鳴らす活動で終わらせずに、自らの出している音に気づかせるために、筆者らは子どもたちに「どんな音がする?」と尋ねて、子どもから多様な楽器の音のオノマトペを引き出し、書き取る作業を行った。約7分ずつという短い時間ではあったが、子どもたちは初めて触れる民族楽器に興味や関心を示し、音遊びを楽しんでいた。

### 3.4 第3時の実践の様子

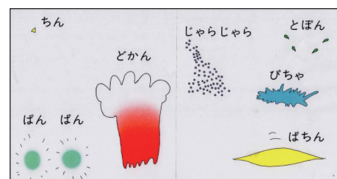
第3時では活動の締めくくりとして、初めに第1時で取り上げた2枚の絵(図1)を、イメージに合うように民族楽器の音で表した。

左頁の絵(図1, p. 2)では、「ビリビリ」「ドシドシ」「ニョロニョロ」などのオノマトペが挙げられ、子どもたちは腕の動きを細かくして振ったり、速度を上げて活発に打ったりなど、絵から感受するイメージを音にしていた。

また、右頁の絵(図1, p. 3)では、「ドンドン」「カリカリ」などが挙げられ、それらに対して、振りを大きくして、ゆっくりと楽器

を鳴らしたり、強く鳴らす表現などもみられた。

続いて、図2の中から一番小さい絵「ちん」を除いた6つの絵を、オノマトペを隠して提示し、絵から感じる音のイメージをオノマトペで表し、さらに民族楽器で音にする表現活動を、全員およびグループで試みた。



【図2】 絵本『がちががちだんどん』p. 20-21

保育者から6つの絵について、「この絵から音が出るとしたら、どんな音かな?」と問いかけると、子どもたちは積極的に手を挙げて、「ボンボン」「ズルズル」(左端の緑色の絵)や、「グワー」「ドッカーン」(左から2つ目の赤色の絵)、「ポツポツ」「チャラチャラ」(左から3つ目の細かい粒の絵)など、それぞれの絵から感じる音のイメージを様々なオノマトペで表現した。続いて、手に持った楽器で保育者が指示する絵を表現した。

子どもたちは、絵の色や形から感じる音のイメージをもとに、楽器を軽く振ったり、大きな振りで力強く打ったりなどして、それぞれに奏法を工夫し、表現遊びを楽しむ様子がみられた。



【写真5】 図2の絵を楽器で表す

## 4. 小学校で行った実践について

### 4.1 方法とねらい

2016年7月5日と7日に、筆者らは京都女子大学附属小学校1年生の2クラスを対象に、同じ内容の授業を行った。授業の進め方について綿密な打ち合わせを行い、山崎が授業を実践し、岡林と佐野(京都橘大学)が参観してVTRと筆記により記録した。授業の概要について表4にまとめた。また、全2時間の指導計画を表5

に示した。

表4 授業の概要

	授業の概要
題材名	色・形から音へ
題材の目標	遊びの中で様々な音があることに気づき、その特徴を知る
指導計画	全2時間

表5 「色・形から音へ」の指導計画

時	○ねらい ・主な学習活動
第1時	<ul style="list-style-type: none"> <li>○絵から感じとった音をオノマトペで表現し、音の特徴に気づく</li> <li>・ウォーミングアップとして、指導者が紙を持って立ち、その紙の動きを形や速さの違いに着目して、オノマトペと身体を使って表現する</li> <li>・絵本から2枚の対照的な絵を選んで、オノマトペを考える。その際、絵のイメージから音の高低や強弱など、音の対比を意識する</li> <li>・グループで9種類の民族楽器に触れ、それぞれの音の特徴をオノマトペで表現する</li> </ul>
第2時	<ul style="list-style-type: none"> <li>○色・形を民族楽器を用いて、音で表現する</li> <li>・前回の2枚の絵を再度オノマトペと身体を用いて表現した後、9種類の民族楽器を用いて絵から得た音のイメージを表現する</li> <li>・新たに6種類の絵について、グループごとにオノマトペを考えた後、民族楽器の中から相応しい楽器を選んで、音で表現する</li> <li>・絵の順番に音の表現をつなげて、グループで発表し、音の聴き合いをする</li> </ul>

#### 4.2 第1時の実践の様子

小学校の実践において、子どもたちはまず、ウォーミングアップとして、教師が様々な動かす紙の動きを真似た。戸惑いつつも次第に自分の体と紙の動きを一体化させ、「ギザギザ」「クシャクシャ」などのオノマトペを発しながら声と動きの表現を楽しんだ。次に教師は絵本から対比がわかりやすい2枚の絵(図1)を取り出して提示し、オノマトペを発しながら身体表現することを促した。

子どもたちは、左頁(図1, p. 2)の絵の中

の1つ1つの細かい図形を見逃さずに捉えて、その形を表現していた。また、右頁の絵(図1, p. 3)では、楕円の下方にある細い線に着目し

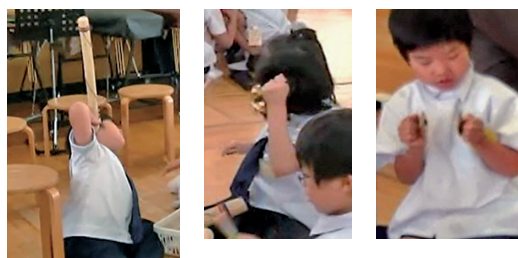


て、楕円が空に浮かんでいるように捉えて表現する子どももみられた(写真6)。

【写真6】図1の絵を身体表現する1年生

全体として、左頁の絵からは「クシャクシャ」「シャキシャキ」「ギザギザ」「クチャクチャ」など、細かい身体表現に伴われたテンポの速いオノマトペの表現がみられ、右頁の絵からは「ドンドン」「ゴロゴロ」「タンタン」など、ゆったりした動きや重い動きの身体表現に見合ったオノマトペが表されていた。

楽器の音探索では、7～8人のグループに分かれ、民族楽器9種類のセットの中から、1つずつ楽器を手にとって一通り鳴らして音を確認し(写真7, 8)、相談しながら楽器シートにオノマトペを記入していった(写真9, 10)。



【写真7】民族楽器の音を確認する1年生①



【写真8】民族楽器の音を確認する1年生②

楽器の様々な音の特徴に気づいた1年生の子どもたちは、音の高低や強弱にも意識を向ける

ことができた。教師がマンジーラ（ひも付きシンバル）とパーランクー（太鼓）を提示して「どちらの音が高いかな」と尋ねると、マンジーラの方が高いと答え、音の高低を捉えることができていた。また、教師は「みんなの持っている楽器を強く鳴らしてみましょ」「弱く



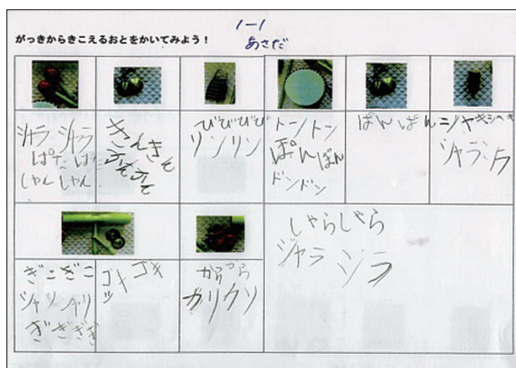
【写真9】 楽器シートに記入する1年生

鳴らしてみましょ」と、音の強弱への気づきを導くように言葉をかけ、楽器を鳴らして音を確認していた。

続いて子どもたちは、グループ内でそれぞれに担当する絵と楽器を決め、どのように鳴らすのかを話し合った。そして、グループ発表では、シンバルを裏向きにこすりあわせるなど、楽器の奏法に工夫がみられた（写真12）。



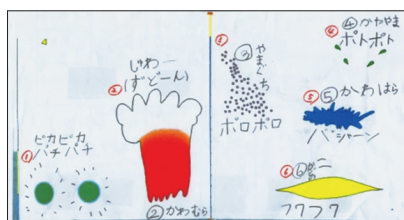
【写真12】 グループ発表する子どもたち



【写真10】 音が記入された楽器シート

#### 4.3 第2時の実践の様子

まずは前回と同様に、絵からオノマトペと動きを引き出し、面白い表現をしている子どもの動きとオノマトペを皆で真似したり、図1の2枚の絵を9種類の民族楽器の音で表現した。その後、グループに分かれ、新たに提示された図2の絵の1つずつにオノマトペを考えて記入した（写真11）。



【写真11】 オノマトペが記入された絵

発表後に、教師がどのようなことに気をつけて音を鳴らしていたかを尋ねると、音の強弱や高低にまで言及がみられ、音の性質と自分の出す音に気づくことができていた。また、絵の形や色の違いによっても異なるオノマトペを導き出し、表す音に変化を付けるなど、絵から感受したイメージに基づく音楽づくりがなされていたことが窺える。

### 5. 考察

#### 5.1 実践内容の検討

幼稚園と小学校では、絵本をもとにした表現遊びと音楽づくりの実践を試みたが、ここでは実践者の感想を含んで、内容の検討を行う。

##### 5.1.1 オノマトペを取り入れたことについて

ウォーミングアップとして行った紙の動きの模倣活動では、当初は子どもたちに戸惑いがみられたが、次第に紙の動きと自分の体や声を一体化させ、活動を楽しむ様子が捉えられた。しかし、オノマトペが伴わない場面もみられた。

幼稚園の実践者らは、「子どもの体がよく動いて、活動を楽しんでいると感じたが、オノマトペ表現と身体表現がうまく結びつかない子どももみられた」（年長担任：松田・藤井）、「紙の動きは分かるし、身体もそのように動くが、年



中児はそれを『ぐにゃん』のような音として表すのが、まだ難しい段階であると思った」(年中担任：大瀧・高橋)などの感想を述べた。

一方、小学校の実践者(山崎)は、「オノマトペを考える活動であることを言葉で説明するのではなく、紙を用いたことで授業に入り易かった。紙は『カサカサ』『クチャクチャ』などのオノマトペを考えやすい材料だと思った」と述べている。ここには、園児と小学生との発達の違いが捉えられる。

また、子どもたちは楽器の音の特徴や、絵から感じるイメージを大人では表せないような多様なオノマトペで表現していた。その表現は、活動が繰り返される中で徐々に豊かさを増していった。年長児クラスの実践者はオノマトペと楽器の表現について「回を重ねるごとに色々な楽器を使い、最後にみんなで絵を見ながら表現することがすごく楽しいという子どもの思いが感じられた」と述べ、オノマトペが子どもの表現の広がりにも有用であることを実感している。小学校の実践者も、「ただ楽器を使って音楽づくりをさせるよりも、オノマトペを使うことによって、子どもたちはより考えやすくなったと思う。低学年の教科書では『タン』『ドンドン』『ドンドコ』などの言葉から音に入ることが多く、オノマトペは、低学年の子どもたちにとって理解しやすいものだと感じる」と述べ、有用性を示唆した。

筆者らはまだ語彙の少ない子どもたちに、様々な音に気づかせることを目的としてオノマトペを用いることにしたが、実践を通して、オノマトペは表現活動の繰り返しと積み重ねによって豊かに活かされていくことが理解できた。

### 5.1.2 民俗楽器の使用について

今回の実践では、これまで体験したことのない民族楽器を使用し、奏法などは教えなかったが、子どもたちは自身で考え、音と向き合っていた。

年中児クラスの実践者は、「いつもと違う保育というか、教え方というか、少し難しい部分もあったが面白かった。子どもたちは一生懸命

で、楽しそうにやっていたと思う」と感想を述べた。また、これまでの楽器を使った指導法と比べて、「メ!メ!」という決まったりズムを打つ前の、本当に楽器って楽しいなあとか、こんな風な鳴らし方もあるんだなあとか、そういうのが子どもの感性とか、子どもの育ちをサポートしていく大事な要素なのだったと思った」という気づきも得られていた。

年長児の実践者は、「いつもだったら、こういう風に鳴らすのよ、と教えてもらってから鳴らすところを、自分で考えてやってみるという面白さがあったように思う」「子どもたちは、それなりに何かを感じていたような気がする。知らない楽器で、鳴らし方も教えてもらっていないから、音の、音楽の本質というか、自分で楽しむという、なんとなくその片鱗というようなのが見えた気がする」と述べ、子どもたちが音を自ら感じて、表現することを楽しむ様子を洞察的に捉えていた。

一方、小学校の実践者も、「あまり触れたことのない民族楽器を使うことによって、音楽づくりにとっても意欲的に取り組んでいたと思う」「形・音・奏法に大変興味を持っていた。全員が一つの課題に熱心に取り組めた要因も、使用楽器によるものだと感じた」「民族楽器は様々な種類の音が出るので、絵から読み取るオノマトペに当てはめやすかったように思う」と、民族楽器の使用を肯定的に捉えている。

表現遊びから音楽づくりへと活動をつなぎ、深めるためには、使用する楽器にも十分に注意を払うことが必要である。

### 5.1.3 視覚的要素からの音の喚起について

絵本を用いた今回の実践では、多くのオノマトペや身体表現が出現し、子どもたちの感性と自由な表現に触れることができた。

色や形など視覚的な要素から音のイメージを喚起する試みについて、年長児の実践者は「面白いと思った。楽器を持って、絵を見て、子どもなりに感じるものがあるのだということがよく理解できた」「自分のイメージとちょっと違うかなと思う表現もあったが、子どもたちが一



生懸命に考えた、その感覚というのは子どもならではのものだった」と述べ、大人が感受するイメージとは異なる子どもの表現を認めようとする保育者の姿勢が窺えた。

また、年中児の実践者は、「絵によって変化をつけようという気持ちのある子どもはいたが、楽器を持つと鳴らすことが楽しいので、そればかりに意識が向くのが、年中児の発達段階なのだった」と述べ、年長児との発達の差異を感じていた。

一方、小学校の実践者は、「絵を見てオノマトベを考えさせるということを初めて行ったが、子どもたちの中から予想以上にたくさんの言葉が出てきたことに驚いた」「何かと大人に与えられることの多い現代の子どもたちにとって、『自分で自由に考え、表現する』という活動が十分にできたと思う」と述べており、視覚的要素から音のイメージを喚起する試みが、音楽づくりの素地となり、子どもの創造性を育むことにつながり得ることが示された。

今回の実践において、幼稚園の子どもたちは、遊びの中で楽器の音の特徴をオノマトベで表し、絵から感受した音のイメージを自分なりに楽器を用いて表現することができていた。また、小学校1年生の子どもたちは、グループで話し合いながら、楽器の音や絵から感受する音のイメージをオノマトベに書き表し、音のつながりや強弱などに意識を向け、奏法を工夫して表現していた。

ここには、幼稚園での表現遊びが小学校の音楽づくりへとつながる可能性を見出せた。

## 5.2 教員養成への課題

岡林は、今回の活動内容である「絵本の色・形などの視覚的要素から音を喚起し表現する」試みを、京都女子大学児童学科2回生の「保育内容演習（音楽表現）」の授業でも行った。学生たちの授業後の感想を以下の表6、7に示す。表6の内容からは、学生たちが色や形を音で表現することに難しさを感じていたことが捉えられる。

また、表7からは学生たちは難しさを感じる

一方で、楽器の奏法に捉われずに新しい演奏の仕方を見出すことや、絵を音に変換することの面白さや楽しさを感じたり、固定観念に捉われずに自由な発想で演奏することの大切さに気づいたりしていることが、理解できる。

表6 学生が授業内容から感じた難しさ

絵から音を考えるのは初めてで、すぐ思いつくものもあったけれど、なかなか発想がでてこないものもあって難しかった。
色と形だけでたくさんのイメージができ、オノマトベもたくさんあると思った。しかし、楽器でオノマトベを表現することは難しかった。イメージを広げられるような想像力が必要だと思った。
色や形を音で表現することに難しさを感じた。発表をそれぞれ見て、表現には正解がないことが分かっていたつもりだったが、それを忘れていたことに気づいた。
見て感じた音を楽器で表現することが難しくて、なかなか進まなかったが、楽器で音を出してから、イメージがふくらんでアイデアを出すことができた。

表7 授業内容に対する学生の興味と気づき

同じ楽器でも一つの音だけでなく、様々な音を奏でることができ、楽器を合わせると違う音色も感じられて、面白いと思った。また、絵を見てこういう音になるのかなと考えるのが楽しかった。
人によってイメージする音が違ったり、楽器の組み合わせによって、こんなに様々な表現ができるのだと感じた。
想像して表現することをグループ活動で行ったことを通して、自分と他者の考え方の違いにも気づくことができ、興味深かった。
同じ楽器でも、鳴らし方が異なると、出てくる音が全く違うことに気づいた。
音や絵の固定観念に捉われず、自由な発想で演奏することが大切だと思った。
楽器の基本的な使い方に捉われない、新しい演奏の仕方を見出すことができるのが面白いと思った。

幼稚園の実践者もこの試みに対して、難しさや面白さを感じていたようである。「面白いと思う反面、指導するのが難しいと思った。私だったら、どうやって表現するかなと考えた。

この活動は決まりがないので、どのように子どもたちに自由に表現してもらおうかと考えると、言葉かけが難しいと思った」「どこまで言葉を自分で使っているのか、また踏み込んでいくことが果たしているのか…。それが大抵、子どもの発想を妨げていたりとか、そこが難しいと感じた」という実践者の感想や意見は、実践を行ったからこそ述べられる貴重なものである。「踏み込んでいくことが、子どもの発想を妨げている場合がある」との言葉は、「表現遊び」や「音楽づくり」において、子どもの表現を引き出すために、どこまで指導者が関わるべきかという難しい問題を孕んでいる。

教員養成においては、何よりも子どもの自由な表現を育むことを念頭において指導していかねばならないだろう。

## 6. 今後の課題

今回の研究では、幼小をつなぐ音楽活動として、「表現遊び」から「音楽づくり」において、「遊びの中で様々な音があることに気づき、その特徴を知る」ことをねらいとして設定し、絵本を教材にして子どもたちの表現を捉えてきた。大人とは異なるオノマトペや表現もみられ、興味深い結果が得られたと考えているが、図形の色、形といった要素と子どもたちの感じる音がどのようにつながっているのかという点については、さらに詳しく解明していく必要がある。また、子どもたちの動作の同期の仕方や、協同性の育ちなど、子ども同士の関係性についても、さらに細かく分析をしていきたいと思っている。

実践事例を教員養成に活かし、これからも大学教育と幼稚園、小学校教育の双方の質の向上を図ることを目的として、幼小連携の研究に取り組んでいきたい。

※本研究は JSPS 科研費（課題番号25381279  
代表者：岡林典子／課題番号16K04719 代表者：佐野仁美）の助成を受けている。

## 註

- 1) ①教育課程企画特別部会 論点整理（報告）2015年8月26日、②文部科学省『次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ（案）のポイント』2016年8月26日
- 2) 前掲1)の② 69頁
- 3) 前掲1)の① 29頁
- 4) 特別経費事業「附属学校園を活用した新たな学校制度設計にかかる調査研究」お茶の水女子大学附属学校園 2010-2015年／新潟大学教育学部附属幼稚園、附属長岡小学校、附属長岡中学校「平成27年度 研究開発実施報告書・第3次」2016年3月／神戸大学附属幼稚園・附属小学校平成26年度研究協議会「幼小接続から幼小一体へ—9年間を一体としてとらえた『初等教育要領』の開発をめざして」2015年1月
- 5) 文部科学省初等中等教育局幼児教育課「平成26年度幼児教育実態調査」2015年10月
- 6) 衛藤晶子「異年齢交流の授業デザイン」小島律子編著【シリーズ・新時代の学びを創る】6『音楽科授業の理論と実践』2015年、92-97頁
- 7) 矢部朋子「幼小の学びの連続性をふまえた低学年の音楽授業デザイン—売り声づくりの実践を通して—」『学校音楽教育研究』日本音楽教育実践学会紀要 vol. 17, 2013年、143-144頁
- 8) 吉永早苗「音楽教育から展開する保幼小連携—[共通事項]でつなぐ保幼小の音楽I—」『学校音楽教育研究』日本音楽教育実践学会紀要 vol. 17, 2013年、145-146頁
- 9) ①岡林典子・難波正明・深澤素子・砂崎美由紀・山崎菜央・高橋香佳・大瀧周子「幼小をつなぐ音楽活動の可能性(3)—幼稚園・小学校での実践を教員養成に活かすために—」、『京都女子大学発達教育学部紀要』第12号、2016年、89-98頁 ②難波正明・岡林典子・深澤素子・砂崎美由紀・山崎菜央・高橋香佳・大瀧周子「幼小をつなぐ音楽活動の可能性(2)—わらべうた《らかんさん》の実践から—」、『京都女子大学発達教育学部紀要』第11号、2015年、11-20頁 ③岡林典子・砂崎美由紀・山崎菜央・深澤素子・難波正明「幼小をつなぐ音楽活動の可能性—京都幼稚園と京都女子大学附属小学校1年生の実践をふまえて—」、『京都女子大学発達教育学部紀要』第10号、2014年、77-86頁 ④岡林典子・難波正明・佐野仁美・坂井康子・南夏世、「幼小の子どもたちの育ちをつなぐ音楽活動の試み—遊び歌《しゅりけんになんじゃ》の実践をもとに—」、『関西楽理研究』XXXⅡ, 2015年、41-52頁
- 10) 岡林典子・佐野仁美「オノマトペと動きによる表現活動に関する考察—絵本を用いた実践

をもとに—」『学校音楽教育研究』日本音楽教育実践学会紀要 vol. 20, 2016年, 219-220 頁

- 11) 絵本を用いた音楽づくりの実践事例については、佐野仁美・岡林典子・坂井康子「『音楽づくり』へつなげる幼児の表現遊び—絵本を用いた実践をもとに—」『関西楽理研究 XXXⅢ, 2016年, 15-31頁の注3に詳しく記載している。ここでは一部を挙げておく。  
東海林恵里子「『もけらもけら』のイメージを音で表す」『教育音楽 小学版』1993年6月号, 44-45頁, 山内規容子「絵本による音遊びで音に浸る」『教育音楽 小学版』1997年11月号, 51-53頁, 大山光子「絵本の世界を音で表現したら, おもしろい」『教育音楽 小学版』2012年7月号, 74-75頁, 石村香織「音楽で表そう! 絵本の世界」『教育音楽 小学版』2013年2月号, 72-73頁などが挙げられる。これらは全て1-3年生における実践であるが, そこに幼小連携の視点は示されていない。なお, 『がちゃがちゃどんどん』を用いた実践としては, 初等科音楽教育研究会編『初等音楽科教育法〔改訂版〕』音楽之友社, 2011年, 44-45頁に掲載された低学年の事例がある。ここでは, 図形の感じを声で表し, 音を組み合わせるという方法がとられて

いる。

また, 幼児を対象とした絵本を用いた事例については, 小池美知子「5歳児クラスの声と動きの活動に見られた表現の様相—オノマトペの絵本を題材に—」『松山東雲女子大学人文科学部紀要』vol. 23, 12-24頁, 無藤隆監修・吉永早苗『子どもの音感受の世界—心の耳をはぐくむ音感受教育による保育内容「表現」の探求』萌文書林, 2016年, 177-178頁などがあるが, 具体的に小学校の音楽づくりへとつなげられている訳ではない。

- 12) 本研究の実践内容について, 科学研究費補助金 基盤研究(C)「幼小連携をふまえた音楽教育プログラムの開発」(課題番号25381279, 研究代表者: 岡林典子)の研究分担者である甲南女子大学の坂井康子教授, 京都橘大学の佐野仁美准教授を交えて, 岡林, 難波, 山崎, 深澤の6名で題材や方法を検討した。幼稚園での実践は, 松田, 藤井, 高橋, 大瀧が行い, 小学校での実践は山崎が行った。
- 13) 2章の内容については, 佐野仁美・岡林典子・坂井康子「『音楽づくり』へつなげる幼児の表現遊び—絵本を用いた実践をもとに—」『関西楽理研究 XXXⅢ, 2016年, 15-31頁より一部引用している。